

フェスティバルトーキー実行委員会		
顧問	野村 嵩	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師
	福原義春	株式会社資生堂 名誉会長
名誉実行委員長	高野之次	豊島区長
賞賛委員長	森田 伝	アサヒグループホールディングス株式会社 相談役
副委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
	栗原 直	豊島区文化工部部長
	東澤 昭	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
委員	岡田恭子	株式会社資生堂企業文化部 長
	尾崎元規	公益社団法人企業メッセ協議会 理事長、花王株式会社 顧問
	熊倉純子	東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授
	小沼克年	アサヒビール株式会社社会環境部 部長
	鈴木正美	東京商工会議所豊島支部 会長
	扇田昭彦	演劇評論家
	永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター 会長
	小澤弘一	豊島区文化工部文化デザイン課 長
	岸 正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	小島寛大	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事
監事	鈴木さよ子	豊島区総務部総務課 長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)	

ディレクターズコミッティ	
代表	市村作知雄
副代表	小島寛大
メンバー	楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、長原理江、横橋応彦

フェスティバルトーキー実行委員会事務局	
事務局チーフ	蓮原円花
制作	小島寛大、楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、高橋まみ、十万垂紀子、松嶋瑞奈、荒川真由子、横橋応彦、小山ひとみ、砂川史織、松宮俊文、堀山真利恵、横井貴子
広報	楢江紗恵、湯川裕子
企画営業	長原理江
票务	渡邊絵里、穴戸 円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
事務局アシスタント	平田幸来
経理	堤久美子
総務	蓮池奈緒子、一色壽好、横川京子

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	加藤由紀子
照明コーディネーター	佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川 益(有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション&デザイン	河村康輔
メインビジュアル	二階謙三(SHOHEI×河村康輔)
ウェブサイト	濱田真一+番松 佑+菅原直也(株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	アンソリュース・ウィリアム
物販	渡辺 淳
執筆・当日パンフレット編集	鈴木理映子

アジアシリーズ・プログラミング	李 丞孝
シュリンゲンジフ特集企画・コーディネート	ウルリケ・クラウトハイム

主催：フェスティバルトーキー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン
 共催：公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
 アジアシリーズ共催：独立行政法人国際交流基金(国際交流基金 東アジア共同制作シリーズ vol.2)
 協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
 後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)、J-WAVE 81.3FM
 特別協力：西武池袋本店、東京百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チヨコ株式会社
 協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西商店街連合会、特定非営利活動法人ゼファ池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会
 宣伝協力：株式会社ポスター・ハリス・カンパニー

アーツカウンシル東京 フェスティバル助成
 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

平成28年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアティブ
 (池袋/としま/東京アーツプロジェクト 事業)

公益社団法人企業メッセ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド 採択事業
 フェスティバルトーキー14は東京クリエイティブフィークスと広報連携しています。
 会期：2014年11月(土)～11月30日(日)

インターン：阿部佑加、入江都美、岡崎由美子、加藤希美、加藤彩、神永真美、川村知也、北村未来、木田みのり、佐藤麻織、清水千奈美、杉本真理江、高橋雅臣、田中秀樹、田中沙織、田中直子、遠山高江、中村みなみ、萩原千亜紀、橋本萌、針谷慧、平石真輝、福地沙織、三羊文乃、山々野知子、山口梓那、吉原早紀

ETワール：青柳佐代子、秋元エマ、阿久根夕佳、朝倉知世、浅川喜子、熱田明美、阿部敬子、荒井純奈、新井朋行、有本裕美子、安藤香里、五十嵐未来、井口真帆、井手上紗織、今川涼香、上野智美、榎悠里、大塚幸、大迎美希、大出晴、小川真理子、小山内梓希、小野寺ありす、畑田みずき、加藤千夏、片山悠太郎、桂星穂子、加藤真帆、菅野沙和子、北原七海、児嶋祐佳、小川恵理子、境田博美、佐川逢枝、崎津梨菜、篠彩夏、藤原沙織、島根悠子、霜島桜子、鈴木南、間島弥生、高橋志穂、高松章子、田中正雄、民谷絵美子、津田真生、照沼結香、渡波航、富永愛香、中俣恵美、中川朋子、中村光子、中村公子、中村光子、根本明美、波田野子乃、峰谷翔子、林ひかり、平野桃里、胡瀬、藤田紀子、富士原和代、又村実穂、三ツ木孝輔、松永愛子、宮川学、宮内隆生、森田結香、山口侑紀、四浦直美、吉田美幸、四方田靖子、跡見学園女子大学 曾田ゼミシシカワゼミ



発行：フェスティバルトーキー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすが創造舎 TEL:03-5961-5202 http://festival-tokyo.jp/
 編集：鈴木理映子、フェスティバルトーキー実行委員会 デザイン：小林 剛 (UNA) ※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Executive Committee
 Advisors: Man Nomura, Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh Actor
 Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd
 Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
 Chair of the Executive Committee: Hitoshi Ogita, Advisor to Board, Asahi Group Holdings, Ltd.
 Vice Chair of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
 Akira Kurihara, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
 Akira Touzawa, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
 Committee Members: Kyoko Okada, General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.
 Motoki Ozaki, President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation
 Sumiko Kumakura, Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts
 Katsutoshi Konuma, General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.
 Masami Suzuki, Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima
 Akihiko Senda, Theatre Critic
 Taeko Nagai, Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
 Kouichi Ozawa, Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section
 Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
 Naoko Hasuike, Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
 Hiroto mo Kojima, Board Member, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
 Supervisor: Sayoko Suzuki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
 Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Directors Committee
 Representative: Sachio Ichimura
 Deputy Representative: Hiroto mo Kojima
 Members: Yuko Uematsu, Chika Kawai, Oriie Kiyuna, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori

Executive Committee Office
 Administrative Manager: Madoka Ashihara
 Production Co-ordinators: Hiroto mo Kojima, Yuko Uematsu, Chika Kawai, Oriie Kiyuna, Mami Takahashi, Akiko Juman, Luna Matsushima, Mayuko Arakawa, Masahiko Yokobori, Hitomi Oyama, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Marie Moriyama, Takako Yokoi
 Sales & Planning: Rie Nagahara

Public Relations: Sae Horie, Yuko Yokawa
Sales & Planning: Rie Nagahara
Ticket Administration: Eri Watanabe, Tsubura Shishido
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Office Assistant: Saki Hirata
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Administrators: Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki, Kyoko Yokokawa

Technical Director: Eiji Torakawa
 Assistant Technical Director: Yukiko Kato
 Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
 Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
 Art Direction & Design: Kosuke Kawamura
 Main Graphic Design: Satoshi Nikaicho (SHOHEI x Kosuke Kawamura)
 Website: Shinichi Hamada + Yu Shigematsu + Naoya Sugawara (loftwork Inc.)
 Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
 Merchandise: Jun Watanabe
 Writing, Performance Leaflet Editing: Rieko Suzuki

Asia Series Programming: Seunghyo Lee
 Schlingensief Film Series Programming: Ulrike Krauthelm

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
 Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
 Asia Series co-produced by the Japan Foundation (The Japan Foundation East Asian Collaboration Vol.2)
 Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
 Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), J-WAVE 81.3FM
 Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chaocott Co., Ltd.
 In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association
 PR Support: Poster Hari's Company
 Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
 Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2014 (Ikebukuro/Toshima/Tokyo Arts Project Enterprises)
 Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)
 Publicity Partner: Tokyo Creative Weeks

Period: November 1 (Sat) to November 30 (Sun), 2014

透明な隣人

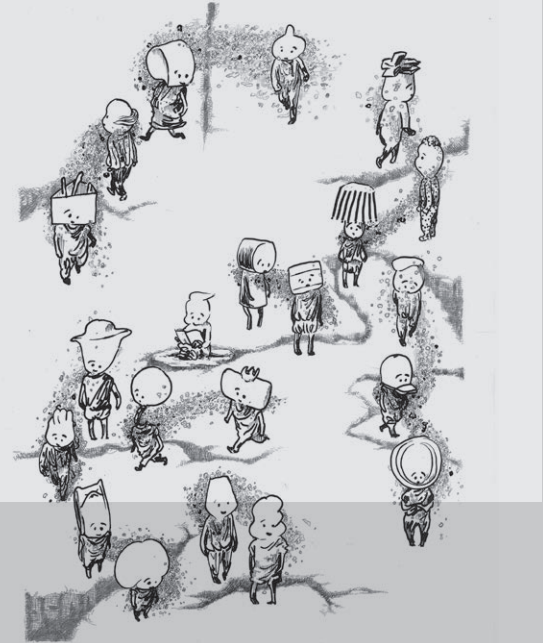
～8 -エイト-によせて～

Invisible Neighbors (inspired by “8”) Text, Direction: Kaori Nishio [Japan]

11/13 (Thu) – 11/16 (Sun)

アサヒ・アートスクエア
 Asahi Art Square

作・演出：西尾佳織



『8-エイト-』から『透明な隣人』へ

長津 結一郎(本公演企画)

東京国際レズビアン&ゲイ映画祭運営委員会の有志の一員として、2014年7月に企画に携わった『8-エイト-』。米カリフォルニア州で実際に起こった同性間の婚姻の合憲性を問う裁判を題材にした脚本をもとに、映画祭の開催に合わせて上演しようという試みであった。当初、この企画を通じて、どのように「非当事者」である人々に活動を届けるか、という、23年にわたる映画祭の運営を通じて生まれた課題への活路を見出そうとも考えていた。また、日本では未だ同性婚は法制化される気配もなく、結婚は異性間のものである、とされている。いまここにすでにある多様な「家族」の有り様は、社会的に認められていないのが現状である。そのような問題の可視化をはかり、観客にとって自らの価値観を揺らがせるような出来事となることを狙っていた。

公演は超満員で幕を閉じ大成功であったが、そこに集まった観客の反応に、不思議な現象を見た。脚本は、裁判で同性婚を求める者たちが勝訴する、というゴールに向けて、難解な裁判用語とともに、ある種のカタルシスを生むストーリーで構成されていた(一字一句脚本の変更は許されていなかった)。それに対して、まるでナイフを突き付けるかのように、ヤジを飛ばすなどの諧謔的な表現を駆使し、一樣な理解を促さないような演出を西尾佳織さんは試みた。結果、観客の反応は大きく割れたのだ。

「俳優や演出は頑張ってたが、戯曲がひどすぎる!」と語る演劇人。「戯曲が素晴らしいが演出は余計で過剰。マイノリティの気持ちがわからないの?」と語るセクシュアル・マイノリティの人々。「学べてよかった。勉強になったし、感動した」と語る

大学生。……ああ、ここにも境界線がある。そうやってわたしたちはいつだって、問題が目の前に差し出されても、その立ち位置からこれっぽっちも動かず、ただ言葉を叫び続けるだけで、さまざまな物事をやり過ごしてきた。

当初予定されていた『8-エイト-』再演としての11月公演に向けて、西尾さんから「私が脚本を書きたい」と相談され、私は全面的に同意した。「さまざまな『わかりあえなさ』についての作品になると思います」という言葉を残し、西尾さんの作・演出により生まれたのが、本日の公演『透明な隣人 ~8-エイト-によせて~』である。

セクシュアル・マイノリティを理解しよう、ではない(理解するという行為はときに権力的だ)。日本でも同性婚を実現させよう、でもない(同性カップルが全員結婚を望んでいるかといえばそうでもない)。画一的でわかりやすいメッセージとそこで生まれる境界線から遠く離れてもなお、すでに、ここに、わたしたちは、ともに生きている。その双方に、いかにリアリティや切実さが内包されているのかを俯瞰しながら想像することなく、境界線上であそぶことは、できない。「当事者」も「非当事者」もなく、ただひとりの人がそこにいる。多様な生き方とそのあいだにある、決してなくなることない境界線が、問題を複雑にしている。それは美しいことではなく、大変なやっかひさを抱え、それでも関係を育みながら、ともに生きていかなければならない。その事実を前にして、立ち止まるような時間となれば幸いである。

固まらない世界で予感を探す

対談 西尾佳織(作・演出)×松井周



『8-エイト-』リーディング公演、そして本作のクリエイションを通じて、さまざまな角度から「マイノリティ」「当事者」を捉え直す西尾佳織と、最新の生命科学・医療などをヒントに「人間のありよう」を探る劇作・演出家、松井周(サンプル)。価値観が多様化、流動化するさなか、二人が眺め、探り出そうとするものは――。

「意見」の国、アメリカ

西尾 7月に『8-エイト-』をリーディングという形でやってみて、ちょっとアメリカに疲れてしまいました。

松井 と言うと?

西尾 セクシャルマイノリティの問題の前に、アメリカのことを知らないと思って、オバマさんの大統領選のキャンペーンに携わったエミリー・サスマンさんという女性活動家の来日講演を聞きに行きました。そしたらまず「政治に興味のない若い人に興味を持ってもらうにはどうしたらいいと思いますか?」と。私も含めてそこにいた日本人がみんな「何だろう?」と考えていたら、答えが「セレブを使います」(笑)。

松井 そこなんだ(笑)。

西尾 「レディー・ガガに意見を言ってもらうことで、多くの人が同調するなり、仮りではあっても意見を持つようになれば、何もないよりはいいでしょ?」と。それを聞いて、ちょっとギョツとしたんです。私はどうしても、いかにわかってもらえるかというところから考えてしまうんですけど、そこには「最初からわかり合うなんて無理で、じゃあどうするか?」という直接的な方法がバーンとあって、何とも「心凄し」と言うか……。『凄いいけど、私には(その考え方は)ないわ』と感じたんです。でもそうやって動いている社会が現実であって、『8-エイト-』はその話だから心して取り組もうと思ったんですが、結局、馴染めないまま終わってしまいました。「こんなことになっているよ、アメリカっておもしろいね」と茶化すところまで行けたら、日本でやる意味もあるかと思ったんですが。



まつい・しゅう

1972年、東京都出身。96年に「青年団」に俳優として入団後、作・演出家としても活動を開始。07年に劇団「サンプル」を旗揚げ、『自慢の息子』（2010年）で第55回岸田國土戯曲賞を受賞した。さいたまホール・シアター『聖地』、文学座『未来を忘れる』など、劇団外への戯曲提供のほか、サラ・ケイン『バイドラの愛』、マリウス・フォン・マイエンブルク『火の顔』（FIT09春）など翻訳戯曲の演出も手がける。

松井 『8-エイト-』のリーディングを観て僕も似たことを感じました。（登場人物は）自分の本質と関係なく、論理的に正しいことをカードのように出し合っているなど。カードというのは自分の分身というか「私の立場は一応、こうです」という表明ですよ。ある論理に則った一種の演技と言うか。

僕は、ほとんど生まれた時から人間は演じていると考えていて、セクシャリティも実は演技に近いんじゃないかと思っているんです。その圧力がアメリカは強いから、演技もわかりやすいものになっていく。だからこそ多人数種が共存できるようになっていて、疲れるかもしれないけど、それがアメリカという国の現実と合っているんだろうなと。もしかしたらヨーロッパとか、近代的自我を求める社会はどこもそうかもしれないけど。

西尾 そうですね。キリスト教とも関係しているんです。

松井 ただ最近、科学がその根底を崩してきているんじゃないかって気がするんですよ。9月につくった『ファーム』という作品は、人間の胃を再生するために、豚の体に細胞を入れて培養するというニュースを聞いて考えていったんですけど、じゃあ、このままそれが進んでいって、豚に人間の子宮を埋め込んで、人間のDNAを持つ受精卵を育てて子供が産まれたとしたら、親権は人間と豚、どっちになるんだろうと考えたんです。しかも豚は喋れ

ないから、代理として養豚業者とかが出てくると思うんですよ。

西尾 「彼はこう言ってます」って（笑）。

松井 そうそう（笑）。つまり生命とか性別とか、誰が所有するのか、誰の所属なのかといった定義や線引きが、科学の発達によって複雑に曖昧になっていくと思うんです。そうなった時に、今よりさらに演技してカードを出さざるを得なくなるし、論理も一層重要になる。例えば子供が何か事件を起こした時に、誰が責任を取るのか考えると、今のところは本人と、せいぜい直接の親だけど、いずれはコンピュータで検査して何%の責任は誰、何%は誰……となるとか。

西尾 最近、宗教のことをよく考えるんです。宗教と科学って相反するように思いがちですけど、実はルールの構築の仕方は似ているんじゃないかと思っています。だからそれ同士で争うのは、結果的に矛盾していくんじゃないかという気がします。で、その末にはアウフヘーベンするしかないというか。今の松井さんの話を伺っておもしろかったのが、科学なり論理なり「もっと良い方向へ」と思って進んでいったのに、気が付いたら、思っていたのと逆向きに進んでいるようなことが起きているんですね。誰も方向転換したつもりはないのに。

松井 『8-エイト-』を観た時、プロバガンダに見える部分ももちろんあったけど「アメリカはこういう社会だから、こういう主張をします」というスタイルと、西尾さんの「そうは言っても人間それだけじゃないし」という気持ちのぶつかり合いみたいな感じがおもしろかったんです。もちろん、それに疲れるっていうのもよくわかる。だから今回、リーディングという形を離れて、そのあたりがどういう風に並べられるのか、すごく興味があります。科学と宗教の話で言えば、科学を強く信じるのも宗教だし。論理かフェティシズムかわからないですけど、西尾さんの距離感がどういふふうに出されるのか観てみたい。

公園のベンチ、電車の座席、同性婚

西尾 先ほどの豚の胃の話ですけど、そういうことが実際に起こり始めていて、それを作品にされる時に、松井さんご自身、どういう方向に進んでいったらいいかという判断を、ある程度定めて作品をつくられていますか？

松井 あまり定めませんが、やっぱり僕は演技が一番すごいと思っていて、自ずと興味はそこに向きますね。テクノロジーが進んでいくと人間の根拠が崩れてくる。母性とか父性という言い方、括り方が、科学の進歩によって、絶対的なものではなく「たかが演技にすぎない」というように見直されそうな気がして。そういう意味ではテクノロジーが進んでほしい。でもつい最近、まさに現実がそうになってきていると思ったニュースを聞きました。合成生物という、自然界にありえない生物を人間がつくる科学が現実的になってきているらしくて。それは恐怖でもあり、解放でもあるんですが。

西尾 合成生物ですか？

松井 水分を取り込んでそれを排泄するとか、血液を循環させるとか、生き物の内蔵の機能を人工的につくって、それを組み合わせてひとつの生き物にするんです。COP12でも議論になっているそうなんです。そういう合成生物を自然の中に放した場合、とんでもない問題が起こるんじゃないかって。

西尾 まさに松井さんの作品ほいですね（笑）。作品をつくる時、はっきりわからないけれど、何か予感のようなものがある気がする、自分はその予感らしきものに向かってつくっているなと思うことがあって。

松井 わかります、僕もそうです。

西尾 つくりながら「自分はこう思っているんだな」と知ったり、「世の中にはこんなことが起きつつあるんだ」と発見していく。『8-エイト-』のリーディングの準備を始めた時、私は同性婚について、出来た方がいいんじゃないかな、ぐらいの意見しかありませんでした。でもスタートする時にある程度の意見がないと苦しいと思って、とは言い簡単に「こうなるべき」という意見が出せない作品でもあって。その一方で 予感というか、興味のある質感がイメージできると、それが推進力になると思っています。



にしお・かおり

1985年東京生まれ。東京大学にて寺山修司を、東京藝術大学大学院にて太田省吾を研究。2007年に烏公園を結成以降、全作品の脚本・演出を担当。海沿いの元倉庫、日本家屋、商店街の空き店舗などでのサイトスペシフィックな作品制作や、鳥取、北九州、広島、大阪など、さまざまな土地での滞在制作も積極的にしている。「カンロ」にて、第58回岸田國土戯曲賞最終候補作品にノミネート。

松井 それは作品をつくる時にとても大事ですよ。 **西尾** 松井さんの作品も答えはない。だけど、この人達がこうして積み重なったらここまで行きました、という感じが開けていておもしろいなあっていうのも思うんです。そう思えるのは、最初の予感がちゃんと残っているからなのかな、とも。その予感みたいなものに向かっていく時、俳優なりスタッフなりにどうやってそれを伝えていきますか？

松井 難しいですよ。例えば「この先このふたりがどうなっていくか」といった問題は、「僕もわからないです」と言っちゃいますね。だから、伝えるんじゃないかと、一緒に考えようよというスタンスです。それはスタッフにもそうで、一緒に考えてもらう。『ファーム』の時は、まずタイトルがあって、そこから美術の杉山至さんが、LEDライトで栽培されている野菜、ああいう無機質な感じはどうだろうというアイデアを出して、まだ舞台ではそれほどLEDは使われていないんですけど、照明の木藤歩さんがその見せ方をいろいろ考えてくれて、LEDの下で人間はこういう風に見えるんだってわかった時に、僕がまたインスパイアされて、ちょっと変なストッピングを入れてみようとか。質感はほかにも音楽の宇波（拓）さんや音響の牛川（紀政）さん、ドラマタージの野村（政之）さん、舞台監督の谷澤（拓巳）さん、そして俳優たちの佇まいを通して、延々とリレーしている感じがあります。



リーディング公演『8-エイト』（2014年）

西尾 あのストップモーション、おもしろかったです。それぞれが少しずつ変な感じになっているとか(笑)。

私は今回、同じ物事や世界を共有していても、どこから見るかで意味するものが違うということを形にしたいと考えているんです。ひとつの事柄について、ある人の言い分からするとこうだけど、この人の言い分からするとこう、という。どんな作品でもテーマになり得るものですけど、セクシャルマイノリティのことで如実に感じると思うことがあったので。

松井 例えばどんな？

西尾 昨日稽古場で話したのは、少し前から公園のベンチに仕切りが付くようになりましたよね。私はベンチは座るものとしかと思っていなかったので「特に要らないけど、あってもいいか」程度に認識していたんですね。でもそれはホームレスを寝られなくするのが本当の目的で、ホームレスの人からすると自分を攻撃するもの、排除するものに見え



サンプル『ファーム』（2014年）©Tsukasa Aoki

る。マイノリティやセクシャリティに限らずとも、会社の上司が良かれと思って飲みに誘っていることが、部下からするとウザいと思うのも同じで。真実はひとつでないということ、エピソードの羅列にせず可視化したい。それができたら、この作品がクリティカルな何かになるんじゃないかという気がしています。

松井 またニュースの話になりますけど(笑)、電車の座席で足を投げ出す、足を開く人って迷惑じゃないですか。その対策のために椅子の前の部分を少し上げて、座りを浅くして膝を上げる。そうすると自然と投げ出せない状態になるから、ゆりかもめはそうならしいです。無意識のうちにそうやって身体が規定される。しかもある種、良いことのようにも見えるから複雑ですよ。

西尾 そういうことが広がって、使う側が知らないうちに決められた方向に決められていくのって、すごく怖いですね。

(取材・文=徳永京子／撮影=長谷川敬介)

作・演出:西尾佳織(鳥公園)

出演:稲毛礼子、兵藤公美(青年団)、松村翔子
内海正考、遠藤麻衣(二十一会)、呉城久美(悪い芝居)、黒川武彦、武田有史、西山真来、野津あおい(サンプル)、葉丸あすか(柿喰う客)、宮崎裕海

ドラマトゥルク・字幕翻訳・字幕操作:岸本佳子(空(utsubo))

舞台監督:本郷剛史

舞台監督助手:篠原絵美

照明:宮永綾佳

音響:中村光彩

映像:森 すみれ(鳥公園)

衣裳:秀島史子・桑原史香(KAKO)

演出助手:福島 真(東京のくも)、加藤健太

イラスト:宮田 篤

チラシデザイン:宮外麻周(m-nina)

記録写真:青木 司

記録映像:(株)彩高堂「西池袋映像」

企画:長津結一郎

制作協力:飯塚なな子

制作:萩谷早枝子、喜友名織江・横井貴子(フェスティバルトーキョー)

FITインターン:入江郁美、針谷 慧

協力:鳥公園、空(utsubo)、青年団、二十一会、悪い芝居、サンプル、有限会社エンパシ、柿喰う客、有限会社レトル、東京のくも、六尺堂、(株)ステージ・ライティング・スタッフ

製作:東京国際レズビアン&ゲイ映画祭運営委員会

主催:フェスティバルトーキョー実行委員会

Text, Direction: Kaori Nishio (Bird Park)

Cast: Reiko Inage, Kumi Hyodo (Seinendan), Shoko Matsumura
Masataka Uchiiumi, Mai Endo (Nijyuni-Kai), Kumi Kureshiro (warui-shibai),
Takehiko Kurokawa, Arishi Takeda, Maki Nishiyama, Aoi Nozu (Sample),
Asuka Hamaru (KAKI-KUU-KYAKU), Hiromi Miyazaki

Dramaturge, Surtitles Translation, Surtitles Operation: Kako Kishimoto (utsubo)

Stage Manager: Takeshi Hongo

Assistant Stage Manager: Emi Shinohara

Lighting: Ayaka Miyanaga

Sound: Hikaru Nakamura

Video: Sumire Mori (Bird Park)

Costumes: Fumiko Hideshima, Fumika Kuwabara (KAKO)

Assistant Directors: Makoto Fukushima (Tokyo-no-kumo), Kenta Kato

Illustration: Atsushi Miyata

Flyer Design: MASHU Miyagai (m-nina)

Photography: Tsukasa Aoki

Video Documentation: SAIKOU DO Co., Ltd.

Planning: Yuichiro Nagatsu

Production Co-operation: Nanako Iizuka

Production Co-ordination: Saeko Hagiya; Orié Kiyuna, Takako Yokoi (Festival/Tokyo)

Intens: Ikumi Irie, Kei Hariya

In co-operation with Bird Park, utsubo, Seinendan, Nijyuni-Kai, warui-shibai,
Sample, KAKI-KUU-KYAKU, Letre, Roku-shaku-dou, Stage Lighting Staff Co., Ltd.
Produced by Tokyo International Lesbian & Gay Film Festival
Presented by Festival/Tokyo